



今年も残り少しくなりました。ツバメなどは南方のあたたかい地域へと旅立ち、そして北からはハクチョウやガンが鳥取県にも渡ってきました。今回のジオフィールドは、こういった渡り鳥の重要な飛来地である鳥取市気高町の「日光池」と、近年そこで繁殖するようになった「コウノトリ」についてです。

1. 日光池の成り立ち



写真1. 冬に現れる日光池の風景

皆さんは、鳥取市の日光池をご存知でしょうか？観光スポット鳥取砂丘から約15kmほど西側、鳥取市気高町日光地域にあります。北は日本海、東西と南は山に囲まれて、鷲峯山も眺められ、日本の原風景が広がる場所です。風味豊かな生姜として名高い日光生姜をご存知の方も多いでしょう。そこに冬だけ出現するのが日光池です。日光池は春から秋の間は田んぼとして利用されています。砂の堆積によって形成されたラグーン（潟湖）を江戸時代初めの大々的な干拓事業によって整備したのが田んぼの始まりです。しかし、標高も低く、用水路は整備されたものの高潮時などは海水が入り込むような地形のために、冬場も田んぼに水をはり、海水の逆流を防いでいます。つまり農作業の省力化となる乾田にできませんでした。しかし、そのことが冬にかつてのラグーンを思い出させるかのような池を出現させることになりました（写真1）。

2. 日光池と生きものたち

冬場、乾田にできなかった日光池は、たくさんの生きものを育むことになりました。今でもメダカやドジョウなどの魚類、両生類、水棲昆虫など多種多様に生息しています。また、栽培しているお米の品種は刈り取り時期が早いため、刈り取った稲からさらに芽が出て、2度目の穂を実らせます。これらの動植物は野鳥たちのエサとなります。多くのハクチョウ類やカモ類、ガン類が越冬地として利用するほか、サギ類やタカ類の姿も見られます。さらに山々に囲まれているため落葉広葉樹の落ち葉など植物由来の養分や、水棲生物や野鳥などの生きものたちの有機物が池や田んぼの養分になります。こうした循環が日光池の豊かな土壌と生態系をもたらしています。まさしく地形がもたらした恩恵でもありますね。コウノトリは、食べ物が豊富で湿地と丘陵地がセットになった地形を好みます。豊かな生態系と周辺の地形が、日光池にコウノトリを呼ぶことになったと言えるでしょう。



写真2. 越冬のため渡ってきたハクチョウたち
提供：椿壽幸氏

3. コウノトリと人々

日本で野生のコウノトリが絶滅したのは1971年、最後の生息地が山陰海岸ジオパークエリア内の兵庫県豊岡市です。絶滅前の1965年には野生個体2羽を捕獲し、コウノトリの人工飼育をはじめました。それから40年の年月を経た2005年ようやく5羽の放鳥に至りました。日本の空に再び、コウノトリが舞うことになりました。放鳥後しばらくすると日光池にもコウノトリが飛来してきたそうです。その後も時々は見かけられ、2016年以降はしばらくの間、滞在をするようになりました。ついに2019年には、日光池からわずか約1km離れたNTT電波塔で営巣し、ヒナの誕生となりました。2020年にも同じペアがその電波塔に営巣を開始しましたが、電波塔の管理の妨げとなり、巣は取り払われることになりました。そのため日光池にコウノトリを呼ぼうと日光地域の住民が立ち上がりました。しかし、当時は行政に相談をするものの協力が得られず、成功の見通しも立たないなか、住民の方が私費で人工巣塔を設置することを決意、実行されました。人工巣塔を設置してからも電波塔の巣を作り直すコウノトリのペアは、3度目の撤去でようやく日光の人工巣塔に巣を作り始めました。そんな地域の皆さんの努力が実を結び、2020年は日光池でコウノトリの産卵・孵化・ヒナの巣立ちに至りました。現在もこのコウノトリのペアは日光地区に定着して、3年連続でヒナたちを巣立たせています(写真3)。ちなみに2019年に巣立ちをした4羽のうち、1羽は中国、もう1羽は韓国で確認されているようです。大きく羽ばたきましたね。



写真3. 日光池の人工巣塔とコウノトリの親子
提供：椿壽幸氏

4. そもそもコウノトリとは？



写真4. 飛翔するコウノトリ
提供：山陰海岸ジオパーク推進協議会

コウノトリはコウノトリ目^{もく}コウノトリ科に属し、外観は似ていますがツルの仲間ではありません。嘴^{くちばし}が黒く長く、翼を広げると2mにもなる大型の肉食の鳥です。黒い風切羽^{かざきりばね}を広げて空を飛ぶ姿に感動を覚える方もいらっしゃるかと思います(写真4)。日本では国の特別天然記念物であり、絶滅危惧種です。世界的にも「絶滅のおそれのある鳥」に指定されている渡り鳥です。おもにロシアや中国のアムール川流域で繁殖、韓国・日本・台湾で越冬しますが、環境が良く、エサが安定して得られる場所には定着することもあります。

コウノトリが日本から姿を消した理由は何でしょうか。明治時代には田んぼを荒らす害鳥として駆除され、戦時中は巣作りに適した高い松の木が伐採されました。戦後は田んぼでの農薬使用によるエサ不足、そしてコウノトリ自身も農薬で体を蝕^{むしば}まれました。他にも様々な要因がありますが、どれも人の生活の変化によるものです。しかし野生復帰の活動により、日本では野外に生息しているコウノトリは309羽、飼育個体は95羽で合わせて404羽にもなりました(2022.7.31現在)。10月に行われた山陰海岸ジオパークの世界審査の際には、審査員の方から豊岡でのコウノトリの復活の活動が高く評価され、日光池の取り組みについても住民の方が審査員に発表をしました。生きものが健全であることは、大地が健全であるということです。ジオパークにとって「野生動物との共存」は、人と大地の付き合い方を示す指標でもあります。(笠木)

《主な参考資料》 キコニアレター(2022.8.31発行、兵庫県立コウノトリの郷公園)
おかえりコウノトリ(2020.12.15第6刷 佐竹節夫)



提供：
椿壽幸氏